

蓑虫の火 冬雷 逆竹 風穴 沸壺 白螺 土用清水 四蓋波 箭根石 三度栗 無縫  
 塔 沖の題目 八房梅 即身佛 略 中

予爰に於て古の七奇を辨じ、今の七奇を撰せんとす、希くは四方の好事家爲之説論せよ、古の七奇、

燃土 燃水 白兔 海鳴 洞鳴 火井 無縫塔

其一 燃土 焚土なり、米山の陽、西北の濱潟町のほとり、鶉の池、朝日の池、同、柿崎の裏田の沼より出  
 る、又三島郡竹森と云る所、用水の溜池、及田の沼より出づ、其外所々に多し、略 中

其二 燃水 草生津の油、即臭水の油なり、頸城郡凡六ヶ所、然れどもその大なるものは、蒲原郡草  
 生津村、同、新津村、同、柄目木村、同、黒川館村等なり、出雲崎の上、蛇崩といふ所、海中に出づ、如此所々

水中より油まじはりて、沸出るを草にしみ付とること也、然れども、いかなる油なることをし  
 らず、水の臭きがゆへに、くさ水の油と稱す、略 中

其三 白兔 諸州共に是ありといへども、他邦の白兔は、即其實にして生る、より白く、冬夏と  
 もに相同じ、灰色なるはその常なりと、越國に産する所は、春の末より、秋の終りまでは、盡く灰毛  
 にして、白は絶てなし、冬は即清白に雪の凝れるがごとし、略 中

其四 海鳴 晴天といへども、雨ならんとするとき、已海潮の響、五六里に聞へわたりて南にあ  
 り、風雨の日も晴んとするときは北に聞ゆ、是をもつて國人陰晴を占ふ、今九州灘に是と類する  
 所ありといへり、略 中

其五 洞鳴 秋晴の日、風雨ならんとするとき、必是をきく、たとへば雲中より雷の轟き落るご  
 とく、雪の高山よりなだれ落るがごとき聲ありて、いづくとも定めがたし、頸城郡には黒姫嶽と  
 いひ、蒲原、古志の邊には蘇門山、淡ヶ嶽ともいふ、又岩船郡には村上、外道山ともいへり、其響更に